

鯉鳥島でのクマネズミ根絶にむけた殺鼠剤散布について

【現状】

鯉鳥島は、現状ネズミ対策が進んでいない状態だが、R6 年度に実施したネズミ類移動性解析手法検証業務（請負者は国立環境研究所 片山先生）において、鯉鳥島にいるネズミがドブネズミではなく、クマネズミであることが分かった。

鯉鳥島から丸島・二子島までは 1km ほどのため、鯉鳥島から丸島・二子島を経由して、平島にネズミが移動する可能性は十分にあると考えられる。ドブネズミが 2 年間見られていない平島にクマネズミが侵入すると、オガヒワ等に深刻なダメージを与える可能性があるため、早急に鯉鳥島のクマネズミを根絶する必要がある。

【対策】

上記を踏まえ、鯉鳥島・中鯉鳥島・小鯉鳥島全域に、ドローンによる殺鼠剤散布を実施

●導入技術・手法

姪島・向島で使用したものと同機となる「マトリス 350」、散布機を使用

（1 フライト 0.6kg の殺鼠剤散布、散布機は粒剤散布にも対応できるよう改良済、散布機と送信機の通信不良も改良済）

船と陸の 2 オペレーションで実施

●実施期間

3/1～3/8 の間で、6 日間を想定

●殺鼠剤

大塚薬品工業（株）製ヤソヂオン

散布後の降雨等による殺鼠剤劣化抑制のため、撥水性のある封筒（二重）に粒剤を封入したものを散布

●散布密度

散布有効範囲を半径 25m の円とした場合、有効範囲の面積は 0.196ha となる。30kg～40kg/ha の散布密度を達成するために、一地点当たり 7.2kg（12 フライト）で 21 地点に散布し、合計 151.2kg 散布（散布密度は「36.7kg/ha」）を目指す。

●海上流出対策

散布時には船上から作業員が散布状況を確認し、海上への流出が確認された場合には、カヤック等を用い、落下した殺鼠剤をタモ網等により回収する。

●実施場所

鰹鳥島・中鰹鳥島・小鰹鳥島の植生がある場所に散布する予定で、散布地点は、ネズミ類の行動圏を考慮し、半径 25m 円内で散布予定。

各島に向かうドローンの離発着場所は、南崎・小富士を想定している。また、南崎のロータリーから各離発着場所までは、船からの離発着、ドローンを飛翔させて運搬するか小富士まで歩荷で運搬を想定。

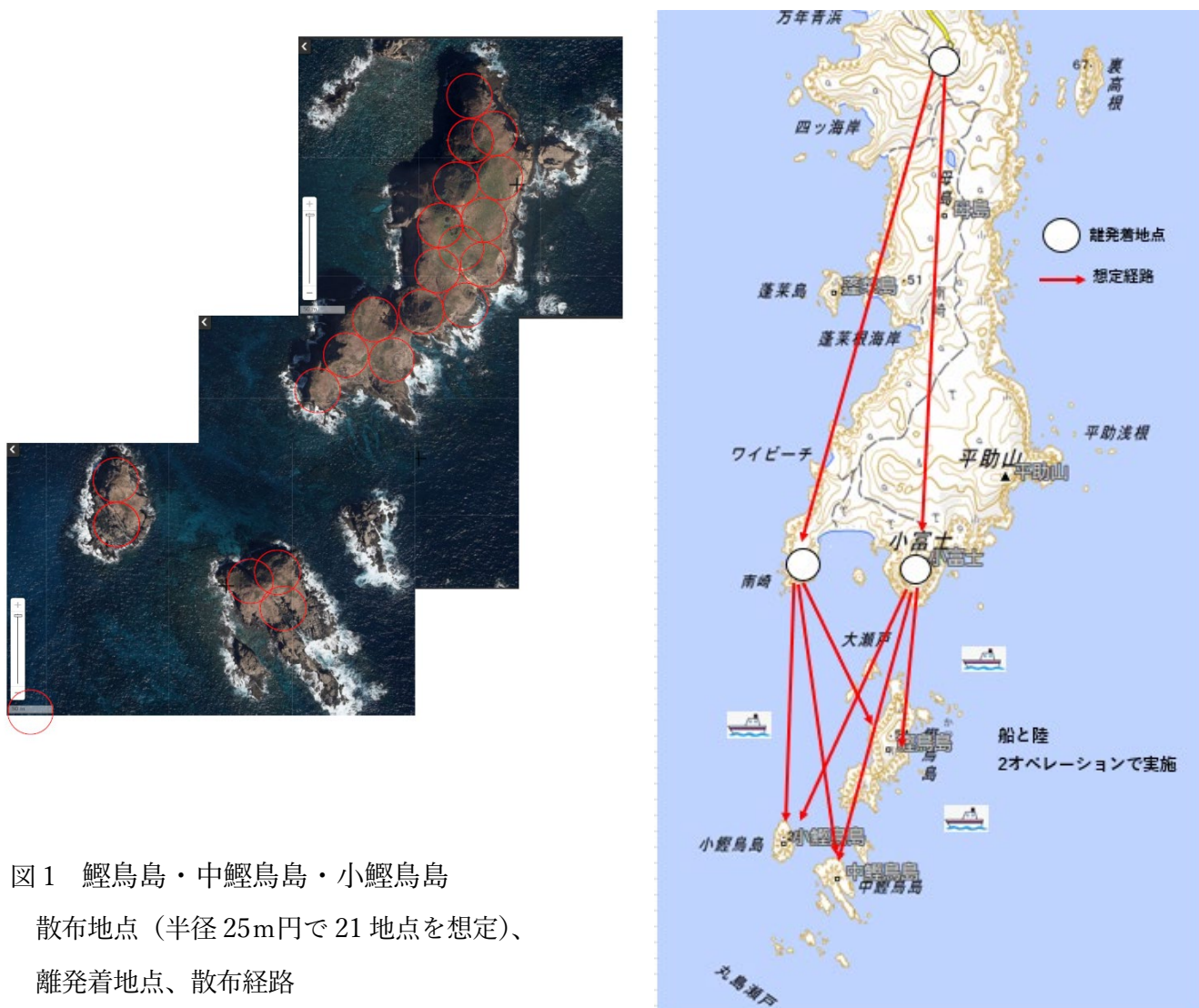


図1 鰹鳥島・中鰹鳥島・小鰹鳥島

散布地点（半径 25m 円で 21 地点を想定）、
離発着地点、散布経路

【論点】

●ドローン散布時の非標的種への配慮について

以下の1及び2の場所で、クロアシアホウドリの営巣の疑いがある。

1では、図2右写真のとおり座り込んだままの個体があり、他の個体が来た際に警戒行動が見られた。なお、繁殖有無は不明。

2は、去年営巣していた場所付近であり、今年はドローンで確認したところ、鳥のような影が映っている。これが植生等による影なのか、誕生したヒナの姿の可能性があるので判別ができなかった。



図2 左:クロアシアホウドリ営巣疑い場所 右:1における写真(小富士から撮影)
(地面に営巣疑いのある種に対して)

殺鼠剤散布の際もカメラを見ながら散布するため、できるだけ営巣場所を避けて実施するよう留意するが、ネズミの行動圏(半径25m円)内での散布の実施は想定している。

(上空を飛ぶ非標的種に対して)

他の島での散布結果を踏まえ、鳥類によるドローンに対する威嚇行動等が続いた場合は、作業休止をし、様子を見る。非標的種の飛行位置で、発着位置や散布場所を変えることで離隔を取れる等が可能であれば、距離をとって作業を再開する予定。
その他、具体的に配慮すべき事項があるか確認したい。

●作業工程

過去の検討会の結果を踏まえ、海況不良時による作業中断の可能性等も考慮し、1 地点毎に全量散布を進めるのではなく、全島散布を優先する。具体的には、1 地点当たり 6 フライトで散布密度「18.3kg/ha」を達成し、それを 2 巡し、合計 12 フライトの散布を行う計画を想定している。

●ドローン散布困難地点での対応について

各地点でのドローン散布の可否は、散布作業時のドローンからの映像によりその場で判断せざるを得ない。現地確認により、「散布予定地点の 25m 半径内では海上流出の危険が高い」と判断された場合には、当該地点での散布は中止し、散布密度を高めるために、周辺の散布可能場所への散布を想定している。

ただし、小鰹鳥島、中鰹鳥島において、封筒型の殺鼠剤散布ができない場合は、粒剤散布を実施することを想定している（散布機を、粒剤散布に対応できるように改良済）。